

〔一〕次の文章を読んで後の間に答えなさい。

冬が初冬だったと思う。寒い時候だった。二人の弟が昼飯時から姿を消したまま、夕方になつても帰つて来ないのである。弟たちの声が聞こえない家は妙にさびしかった。どこにいても必ず帰つて来るべき、おやつの時になつても帰つて来ない。私と母は二人きりでひつそりとお茶をのんだが、その時にはもう例の不安が争えな色や線になつて、彼女の顔に描き出されていた。それを見ると私はまたふっとしてしまって、二人のゆくえをあやしむような言葉などおくびにも出さなかつた。

問四 豆腐屋が通ると次には夕刊が来、それから街灯というふうに遠慮なく夜は迫つて来ても、一人は帰らなかつた。
問五 家の前の病院の電灯はいつものように赤く、さむざむと暮れてゆく冬の夕方の白つけた空気の中にその色が妙にさびしかつた。

ぱつと部屋の電灯にも電気が来る、それが来たとき「いよいよ來た」と私は思つた。

もちろん母は早くから不安にさいなまれていたにちがいない、しかし私にはそんな早くからその不安をうつたえることはできない。(それは私がまちがいなく反発することも事実だつたが、母はある正直さから自分の時をわきまえないやっかいな心配を恥じてさえいたというのもまちがいのない事実なのである)しかし今はもう電灯も来たのだ。夜になつたのだ。あれも心配するのが当然である時が来たのだ。——こう思つて母は探しに行つてくれと言いに来るにちがいがなかつた。

電灯が母の不安を爆発さす関所であつたわけをこういうふうに考えてもまんざら妥当を欠いてはいないだろう。すなわち時計の針の動きにしろ、日光がうすれてゆく加減にしろ、それは時々刻々の変化で、したがつてそれにともなう母の不安もなめらかな増加を見るに過ぎないが、電灯が夜の来たことの争えない証拠であり、厳とした道程標である以上、夜が迫つて来る感じはその瞬間飛躍して、ぐんと色の濃いものになり、母の不安ももう

立つてもいられない程度に激変する。

とにかく町中を暗やみに封じこめてしまふ夜が来たのだ。

思つた通り母は私の部屋へ入つて來た。

「お前この近所にはいないんだよ。○○さんの所にも、××堂にも。お前どっか心当たりがありませんか」

「心配しなくつてもすぐ帰つて来ますよ」

(中略) 「私」は、弟たちが父の所に行つたのではないかと母に言つた――

「だって、歩いて行くのは大変だし。あの子らはお金は持つていらないはずなんだよ」

「でもわかりませんよ。一度電話をかけてみたらどうです」

母が立つて行つた後で、今ころかけても父はもう帰り道だらうなどと私は考えていた。

しかし電話もだめだつた。帰り道だと思つていた父はその晩はいそがしくて会社にいて電話口へ出たが、弟たちは行かなかつたこと、それから次郎に捜せられることを言つて電話を切つた、と母はしづみながら言つた。問六 とうとう捜して来いと言うのだな！ と思うと私はまた腹が立つてきた。「次郎に捜せられ！」と父が言つた
というのもどうかわかるものか。

「ね、捜して来ておくれ」

「捜しに行つたつてむだですよ。いつたいどこにいるかというあてもないのに。いつものことですよ。すぐ心配するんだ。この間だつて。――」

と言いながら私は母の、おろかな、心配なるものの例を列挙し出して、毎度の心配のまきぞえになつて、いつもばかりた捜索さうさくにやられるのを徹頭徹尾てつとうてつび回避しようとした。

「帰つて来ますよ。三郎だって十にもなつてゐるんだから迷子まいごになつても心配なんかありません」

しかし母も負けていずに、迷子を出した不幸な家の考証をはじめた。そして最後には父の命令もあるのだし、「強情はつて行かないのならお父さんに言いつけるよ」と厳しい目をした。

「だって、腹もすいてるし」と私は言つた。ほんとうにそうでもあつたし、また一つにはこうなれば飯に難くせをつけてすねてやれ、そのうちに帰つて来るかもしれないというのが私の腹であつた。

「だからご飯も用意してあるから」

と言うので立つて行つてみると、電灯の光の下のちゃぶ台の上には私一人分だけの茶わんやその他の陶器がそ

の冷たい肌はだの上におのの一つずつの電灯の小さい影像えいぎを映し出している。落ち着いて飯でも食つてやれといふこじな計画も気が乗らなくなつてしまい。問七 こんな時には意地にでも空腹をかかえて飛び出すというあてつけの方が私の腹立ちには快かつたので、私は第一、そんなさびしい食卓たつでは食欲が起こらなかつたし、ちゃんと用意までしてあるんだなと思うと、だれが食つてやるものかと思つた。

「お前食べないのかい」

私は腹が立つて行つてみると、足音であたり散らかして、どんどん家を飛び出した。

まず私は近所の○○さんや××堂へ行つて、弟たちを見なかつたかとか、どこかへ行くと言つていなかつたかとか言つて聞きただしたが、何の手がかりも得られなかつたので、不平でぶーぶーふくれつ面をしながら暗い道を○○神社の方へ歩き出した。私の心中の不平は憤りとなつて、その道々弟たちの上に燃えた。

「つかまえたら、なぐりつけてやる」

しかしその報いられない捜索が別に確かにあてのあるものでもなく、そして何というつまらなく腹立たしいことを強いられているのだろうと思いながら、それにぎやかな通りを歩いていると、小料理屋の格子から冷たい夜氣の中へ白くわきでてくる湯気や、しょうゆのたきつまるにおいはたまらなく私の空腹をさびしがらせはじめた

のだった。するとまた、こんな考えもうかんでくる。——（もう彼らは家へ帰っているかもしない）そんな気持がわいてくると、一人で空腹をおさえながら不熱心にその辺りをほつつき歩いている私には、その好都合な想像がやがて本当の事実として映るようになり、無責任にいいかげん歩きまわったのを機会に私はまた急いで家へ帰りはじめた。

「帰っていたら、いきなりなぐってやる」

私はまだ不平を街上に鳴らしながら家まで帰った。

しかし私のそのせきこんだ予想も、家のしきいをまたいだ瞬間にそれがうらぎられていたことがわかった。弟たちはまだ帰っていなかつた。しかし会社からは父が帰つていた。

「どうだつた」

父はたずねた。

「〇〇神社へ行つたのですがいませんでした」

「××町は。あの・・は」

「行きませんでした」

「あそこを搜しておいで」

問八 空腹の私に飯も食わさないでもう一度近くもない××町までやろうとする父の気持が、乱暴にも、ざんこくにも言語道断に思えた。（飯も食わずに〇〇神社まで行つたんだぞ）と心中ではぶんぶん憤つていた。父の前には温かな湯気を立てているなべがあつた。私はそのにおいに力強くひきつけられた。

さつき食わずに出了ものを、母がなぜ、飯を食つてから行けと言わないのだろう、私にはそれがまた腹立たしかつた。私はまたこじれた考えをいだいた。ここで飯を食おうと言いはろう。父は私がもう飯をすませたことだいなかつた。

「さきにご飯を食べさせてもらいます」
「なんだ、ご飯はあとにしてすぐ行つておいで」
「お腹がへつてるんです」

「それじゃ三郎や四郎はどうなんだ。あれらも腹をすかせてるじゃないか」

「それは勝手です」

問九 自分ながら言い切つたなと思った。

父がみるみる目に角を立てるのを母は制しながら、さつき食つて行けと言つたのを食わずに行つたのだからと言つて飯の用意をしてくれた。

私は意地悪くそれを見ながら、うんとこさ食つてやれ、と思つていた。しかし意地もなにもない真正の空腹にその飯は意地でも張りでもなくほんとうにうまかった。しかし私が飯を食いかけるが早いか、私はもう搜しに行かなくともいいようになつた。弟たちが帰つてきたのだつた。

下駄たたをぬいでいる小さい足音を聞いた時、私たちはおやと思つた、帰つてきたのかな。そう思った瞬間、彼らはいつたいどこに今までいたのだろうという疑問やその時まで私の心の底にあつた心配が自由によみがえつてきつた。

電灯の光の下へ、ぱたぱたと姿を現した時彼らは二人とも、しょげて、まじめであった。それで父や母に対す

るこじれた氣持もその瞬間ずつこうすれてしまつたように思えた。

「帰つてきた」

十になる三郎はものにおびえた表情をしていたし、七つの四郎は泣いていた。

「どこへ行つてた」

父はまず厳しくきいた。三郎は、築港へ軍艦を見に行つたのだと低い神妙な声で答えた。このあいださかんに母に行かせてくれるよう三郎がねだつていたのを思い出して私は合点がいった。母はいつもの心配性でその時承知しなかつたのだった。

「築港へ」

父も母も少しあきれていた。もちろんそれは無鉄砲な遠足に相違なかつた。

問十一 「ばか、ここまでおいで」

私は父が三郎に厳しく体罰を加えやしないだらうかと思つた。

すでに入る時泣いていた四郎は、だんだん泣き声を大きくしてわめきだした。声を大きくすればするほど、そして涙を流せば流すほど、彼がこの家へ帰りつくまでになめつくした、恐怖や、空腹や、たよりなさや苦痛のいたでがそれだけ早くいえるかのように。またその泣き声は問十二 の泣き声だつたのだ。その泣き声の合間合間に四郎は「……でぎんちゃんが……したんだよう」と言つてわけのわからないうつたえをはじめた。長い間の心配からの解放の氣持も私にはよくわかった。それは志賀直哉の「真鶴」や芥川龍之介の「トロッコ」にかかれている子どもの氣持そつくりの氣持であつたにちがいないのだ。「しかし四郎あまえてやがるな」と私は思わずざるを得なかつた。それゆえ、彼をただ泣かしておくだけで何ともかまつてやらない母の正当な処置が私は快く思われた。

(梶井基次郎「夕凧橋の狸」)

問一 └部 a・b の意味として正しいものをそれぞれ選びなさい。

a 目に角を立てる

- 1 驚いたり怒ったりして目つきを変える
- 2 思い知らせるためにひどい目にあわせる
- 3 怒りをふくんだするとい視線を投げる
- 4 あら探しをして何かにつけて敵視する

b 合点がいく

- 1 意見が一致して対立がなくなる
- 2 条件がかなつて受け入れられる
- 3 悩みごとが解決してすっきりする
- 4 事情がよく理解でき納得できる

問二 └部「例の不安」とあります。具体的にだれのどのような不安ですか。

問三 └部「二人のゆくえをあやしむような言葉などおくびにも出さなかつた」ときの「私」の説明として

ふさわしいものを選びなさい。

1 弟たちのことばかり気にしている母が不快なので、母の不安にまったく気づかないふりをしている

2 自分が捜しに行けと言われるのがいやなので、親の不安がることを決して言わないようにしている

3 親の不安がもっと大きくなると氣の毒なので、二人に関することにはなるべくふれないようにしている

4 弟たちが帰つてこないことで自分が責められるといやなので、母の不安に同調しないようにしている

問四

——部 「家の前の病院の電灯はいつものように赤く、さむざむと暮れてゆく冬の夕方の白つけた空気の中にその色が妙にさびしかった」とあります、「私」が「妙にさびしかった」と感じたのはなぜですか。

1 いつもいる弟たちがいないので、日常とはちがって何かが欠けたような気分がしていたから

2 病院の電灯の赤さが、弟たちが危険な目にあっているかも知れないという悪い想像をさせたから

3 うす暗い辺りの風景とは正反対に赤く燃えるような電灯の光が、身にしみる寒さを意識させたから

4 母の不安な気持を知りながら、たがいに言葉も交わさずにただ刻々と時間だけが過ぎていったから

5 部 「いよいよ来た」とありますが、「私」は何が「来た」と思ったのですか。具体的に説明しなさい。

6 部 「次郎に搜せろ!」と父が言ったというのもどうかわかるものか」とあります、このときの「私」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 父が私の気持を無視して弟たちを捜させるはずがないという父への信頼^{じんらい}が、母に対する不信となつて表れています

2 父の言いなりになつて弟たちを捜せと私に命令する母への怒りが、父に対する八つ当たりとなつて表れています

3 何としても私に弟たちを捜させようとしている母への反発が、父の言葉はうそではないかという疑いとなつて表れている

4 私に弟たちを捜せると言う父に対する失望をぬぐいさりたいという願望が、母はうそを言つてているという考えとなつて表れている

5 部 「こんな時には意地にでもうだれが食つてやるものかと思った」ときの「私」の説明としてふさわしいものには○、そうでないものには×をつけなさい。

問七

——部 「空腹の私に飯も食わないともう一度近くもない××町までやろうとする父の気持が、乱暴に

も、ざんこくにも言語道断に思えた。(飯も食わずに○○神社まで行つたんだぞ)と心中ではふんふん憤っていた」ときの「私」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 無断でどこかへ出かけたまま帰つてこないのは弟たちなのに、関係のない私までも罰するかのようにご飯を食べさせようとしない父のあきれるほどひどい処置に憤慨^{ふんがい}している

2 息子の食事の心配もせず平氣で再び捜しに行かせようとする父に対し、自分の意志でご飯を食べずに飛び出したことをたなに上げて、親としてあってはならないことだと憤慨している

3 空腹に耐^たえてまで捜しにいった自分をねぎらいもせず、これ以上弟たちを捜してもむだだという私の主張にもまったく耳を貸さない父の冷たさに憤慨している

4 いなくなつた幼い弟たちを必死に捜し回ってきた私に再び捜せと命令して、自分だけは平然と食事をしようとする父に対して、あまりにも無神経だと憤慨している

問九 ━ 部 「自分ながら言い切ったなと思った」とあります、「言い切った」とはどういうことですか。

- 1 理想的な存在である父に対してはっきりとまちがいを指摘した
- 2 高圧的な父に対して自分の正しさを最後までしっかりと説明した
- 3 がんこな父をあっさりと納得させるほど強く自己主張した
- 4 絶対的な存在である父に対して堂々と自分の意地をはり通した

問十 ━ 部 「無鉄砲な遠足」とありますが、どのような点が「無鉄砲」なのですか。二点書きなさい。

- 1 部「私は父が三郎に厳しく体罰を加えやしないだらうかと思った」とありますが、このときの「私」の気持の説明としてふきわしいものを選びなさい。

1 父も母も、三郎のおろかな行動が四郎を巻きこんだことに腹を立てていると思われるので、かわいそつたが厳しく体罰を受けるのは仕方がないとあきらめている

2 三郎が父にはとても神妙な態度で接しているが、きっと内心ではねだつた時に連れて行ってくれなかつた母をうらんでいるにちがいないと想像している

3 三郎の神妙な態度が、十分に後悔し父からしかられることを覚悟して帰ってきたことを感じさせることで、これ以上つらい思いをさせたくないと三郎に同情している

4 三郎が父や母にしかられることをしてしまったのは事実だが、泣かないで神妙にしている三郎に父が厳しく体罰を加えることがあるだろうかと疑つている

問十二 □に入るものを選びなさい。

- 1 家へようやく帰りついた、重荷を下ろした喜びのあまり
- 2 家で待っていた父から、厳しくしかられる恐怖のあまり

問十三

- 3 無責任な外出につきあわせた三郎に対する怒りのあまり
- 4 とにかく初めての冒險をなしとげたという満足のあまり

問十四

「『ってゆうか、あたし的にはとりあえず、やめたほうがいいかな、とか、思つたりして……』。あいまい言葉のオンパレードとも言える若者たちの会話を聞いていると、何を言いたいのか、相手にきちんと伝わっていないのではと心配してしまいます」と、札幌市^{さっぽろ}の五十代の女性からお便りをいただいた。

「あいまい言葉をたくさん使う若者は、自己主張が苦手という印象があるかもしません。でも実際には、そうではないという結果も出ています」。フリーアナウンサーとして活躍する梶原しげる（五一）さんが報告を寄せてくれた。

「〔二〕次の文章を読んで後の間に答えなさい。

- 1 四郎を泣き止ませるには放つておくのがよいため
- 2 四郎のあまえを受け入れない姿勢を示すため
- 3 四郎の泣き虫ぶりに内心うんざりしているため
- 4 四郎ではなく三郎の言い分をよく聞くため

問十四 この文章の後に続く「私」と「弟たち」との物語を百八十字以内で創作しなさい。

にまとめている。

調査で取り上げたのは、「つてあるじゃないですか」「なにげに」「とか」など、三十三のあいまい言葉。約二百人の学生を対象に心理や行動を分析したところ、これらの言葉をひんぱんに使う人の方が、相手に自分の主張を伝える能力が高いとの結果が出た。

あまり直接的な言い方をすると、反発を受けやすく、相手の心にすっと入っていけない。言いたいことは、あいまい言葉というオブラートでくるみ、相手が受け入れやすいように表現する——。「それが、彼らなりのコミュニケーション戦略なのでしょう。彼らは知恵をしぶって言葉を選んでいる。その努力は少しは理解してやりたい気がします」と、梶原さんはいう。

ただし、そんな「あいまいコミュニケーション」が機能するのは同年代の仲間同士に限られる。あいまい言葉そのものに拒否反応を示す大人には通じない。それに気づいていないところに、若者たちの戦略ミスがありそうだ。

(橋本五郎監修 読売新聞新日本語企画班『新日本語の現場』)

問一 部「あいまい言葉をたくさん使う若者は、自己主張が苦手という印象があるかもしれません」とあります、「自己主張が苦手という印象」はどのようなところから生まれるのですか。

問二 部「でも実際には、そうでないという結果も出ています」とありますが、「そうでないという結果」とはどのような結果ですか。具体的に書かれた部分を四十字以内でぬき出し、始めと終わりの三字を書きなさい。

問三 部「彼らなりのコミュニケーション戦略」とありますが、具体的にどのような戦略ですか。四十字以内で書きなさい。

〔三〕次の各文の□に入る言葉を選びなさい。

- 1 中学生のA君が小学生の弟にスポーツで負ることとは□あるまい。
2 秋の箱根の紅葉はとてもみごとで□にしきの帯をひろげたようだ。
- 3 大切な花が台風でしおれてしまいBさんは□悲しい気持だろう。
- 4 来週行われるピアノの発表会を聞きに□みんなで来てください。

ア むしろ イ ゼひ ウ もっぱら エ さぞかし
オ よもや カ どうも キ あたかも ク なぜ

〔四〕次の――部1～5のかたかなの部分を漢字で書きなさい。また、――部6～8の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

1 イッショウにふす 2 サイシンの注意をはらう 3 イサみ足 4 セイヒンを売る

5 タイキョクに立つてものを見る

6 採る

7 省みる

8 文様

